

給へ、これを救ひ給へなご口々にのしければ、物さわがしく心定かならず、しばらくは内院に入りて人しづまるを待ちけるが、やうく深更に及べば、みな人下向して燈明の法師と病める人どばかりになりければ、件の歌を出だし謹んでよみあげけり。

南無やくし諸病悉除の願なれば、身よりほとけの名こそ惜しけれ。

とよみも果てぬに、内院よりけだかき御聲にして、

ひらさめはたど一時のものぞかし、おのがみのかさそこにぬぎおけ。

と聞えけり。有がたき佛敕やとしばらく禮拜して、たち上り見れば、身のかさはおちてあともなし、病める人骨髓に通りに尊く思ひ、すぐに發心して諸國修行に出でけるとかや。

一休衆道ぐるひの事

○和尙は衆道すさにてましくて、兒かつらぎへの艶書妓かしこに有りといへり。されど御心の動き給はざる事は、駿河の府中に小玉辨之助とて鄙に似げなき美童ありけるに、和尙ふかく口説き給へどもしたかはざりければ、狂歌をおくり給ひける。

花は根に鳥はふるすにかへれども、人はわかきにかへることなし。

とばかりにて、小辨どのまゐる、都がたのづくにふと書きてつかはされければ、御歌のころにや恥ぢけん、しみなく御返事申上げて、すなはち其夜まゐりて、御望みに隨ひ申さんぞ申上げければ、和尙うなづき、よくこそ來りたれ、今朝まではさこそ思ひしが、今まもは

や用事もなしとて歸し給ひけるとかや。

傾域に御引導の事

○赤坂の宿にいつきといへる名高き遊女ありけるが、しばらくの病にて身まかりけり。親しきものども集りて申しけるは、それ女は五障三従の罪ふかきにまして、流れの身なれば大かたにてはかなふまじ、いざや一休和尙を頼みたてまつりて弔はんと、御旅宿へ参り、かく罪ふかき女にて候、御なさに御引導なしくだされ候は、ありがたくこそ候はめとひたすら願ひければ、一休やすき事とて、すぐにかるくしく其家にいたり、御引導遊ばしける。

僧は衣を賣り女は紅をうる、柳はみどり花はくれなる。

喝とのたまひければ、棺のうちより光明かやくと見えしが、剩へ其夜に、日ごろ親しくなしたる者どもの夢に、成佛どげたるよしを告げるとなり。又同所に煎茶を往來の旅客にうりて世のいとなみとせし男ありしが、病もなく頓死したるを、近きあたりの者ども寄集り、水などをそそぎ氣つけなご吞ませけれども、更に其甲斐なかりしかば、折ふし一休御通りありけるを幸ひの事とて、其よし申上げ御引導を願ひければ、

一ぶく一せん一期の間、末期の一句雲客の話。

喝と御引導ありけるが、是も往生をどげたりと、不思議にあたりの者の夢に見えけると也。

大食の御咄の事

○或とき殊の外大ふうをいふ男ありけるが、一休和尚の御相伴の非時を賜はりけるが、和尚の仰せけるは、さても其方はめづらしき大食かなと曰ひければ、かの男、いや是はたぶると申すほどにてはなく候、某が若き友だち寄合ひ、かけるく致したるとき、餅米一斗つかせ、我等一人して食すれども、いまだ食ひたらざりければ、あたりには粟餅した、か有りける故、それをも残らず喰盡したるに、餘りに腹ふくれたるより、河邊へ走り行き、大きな舟あるを見るより、其舟を横にちりて川水をせきとめ申したりと首ふりて語りければ、一休聞しめし、さてもおびたゞしき大食かな、それほどの大食はめづらし、さりながら愚僧が存したる山伏ありしが、これも大食人にて、かけ録して餅米二斗をつかせてそれを一人して残らずくらひ、餘りに腹ふくれけるにや、廣き松原へはしり出で、三抱へばかりの松の木を捻折りて腰をかけ休みける所へ、小さき蛇の大なる蛙を呑み苦しげに見えしが出できたり、かたはらの見なれざる艸を喰ひけるに、ちみ／＼と腹へりたり、山伏これを見て、さてよき事を見付けたる物かなと、くだんの艸を取りて喰ひけるが、運のつきたるにや、此くさ人の消える草にて、山伏は忽ち消えて、二斗の餅と兜巾、鈴懸、螺貝、金剛杖など餅にもたれたりと言ひ給へば、彼男顔色をかへて恥入り、早々歸りて、其のち二たびまゐらざりけるとかや。總じて狂がる空言はいはざるもの也。かの男の大ふうをいまましめ給ふ處也。

化物御退治の事

○北國方へ御雲水ありし時、ある古き宮に大なる石燈籠のありけるが、いづくともなく毎晩燈明をとぼしけるが、其燈籠のかたはらを、大の法師毎夜ぐるり／＼と廻りけるを、人皆これを見て恐れずといふ者なし。されども又誰あつて見とゞけんと言ふ者もなかりけり。一休これを聞しめし、拙僧今夜これを退治すべしとのたまふに、所の者ども大に喜び、日の暮るゝを待ちかね、くだんの所へ行き見て見るに、其夜もたがはず燈籠をめぐるごと風車をまはすが如し。皆人申しけるは、さても一休坊が退治あるべき由曰ひしかども、中々その験もなき事と、とり／＼評判なす所へ、又法師一人あらはれて、其夜は二人馳せめぐるほどに、皆人いよく恐れをなして歸りしが、翌日あるくを待ちて一休の宿所へ参り、御坊の御口とは相違して、昨夜は化物もの、又一人ふえて中々鎮まるけし見え申さすといふに、一休聞き給ひ、其一人は拙僧にて、夜もすがら追かけ廻り、遂に化物ものは踏倒しけるほどに、もはや今夜よりは出でまじきと、化物の誓言をたてけるにより許し遣したり、心易かれ今夜より出づることあらじと示し給ふ。果してそれよりは、何の怪みもなかりけるとかや。ふしきも世にあることなり。

豆の秀句の事

○一休和尚は至つての輕口にてましませば、ある地頭の奥方より御申越しあつて、何とぞ御咄承りたきよし和尚聞しめし、何より安き御事とて早速まゐり給へば、上臈たち居ならび

て聞き給ふに、和尚まづ佛説を切口上にて御物語りありたりければ、上臈衆感に堪へかね、御教化の御はなし有がたく候へども、餘り短くて本意なし、願くは永々と退屈する迄御物がたりあれかしと申されければ、一休、ともかうも望にまかすべし、幸ひはなしこそ候へ、拙僧さる方へ夜咄に参りけるに、煎豆を菓子に出しけるが、かたはらより、この豆秀句となしたべんといふ、皆尤もとて、まめの子のまめなやうになご口々に申す中に、賢くもなく見ゆる人出で、申さるには、奥さまの吉野参りとしてした、か摺みて喰ふ者あり、人々聞きて、これはいかに、豆の秀句に奥様の吉野参りとは心得ず、いかにくせむれば、扱は御存じなきにや、井の内の蛙大海を知らぬためしあり、何れも御ぞんじのとほり、當春それがし頼みたる人の奥さま吉野へ参り給ふに御供してまゐりしに、道すがら名所舊蹟うちながめ、さほの川邊、井出の里、玉水などやうの名所つぶさに見物して、ほごなく吉野にも成りぬれば、山はさながら雪かと思まがふばかりなり、神社ぶつかく残らずめぐり拜み、夫より高き所のぼりて四方を打眺め給ふ所、俄に嵐ふき來りて、奥さまのぬり笠を谷底へ吹おとしける、其ときそれがし、深き淵に臨むが如く薄き氷をふむ心地して、巖をつたうて遂に取つて歸りぬ、されども笠は少し剥けたるを、おくさま御覽じて、さてもうたての事かなとのたまひし、それより立田法隆寺奈良初瀬寺などいふ名所、三つ山達磨寺、當麻などやうの舊蹟御見物あつて御上京ありしところへ、御一門の御女中の見まひなされけるに、さもしんじやうなる塗

笠をめて何れも御越しありけり、それにつけて思召し出され、彼はげたるを塗らせよと仰せありけるほどに、塗師屋へ詭ふれば、銀三錢目にてぬらんと申す、奥さま聞召して、それはむつかしき事かな、さらば手ぬりにせよとて漆屋へ鳥目二疋をもちて漆を求めけるに、むくろじ程ありけるを、總じて奥さまは物事おびたしくのたまふゆゑ、是は少きことかな、豆粒ほどありとのたまひける、さてその豆の秀句には三國一のことかと自慢らしく申されたりと語り給へば、上臈衆退屈して色わるく成りにけり。

國司へ下帯を遣はさる事

○或御大名の家中に片岡彌太夫といふ浪人が宅、に一休ましましてけるを、此所の地頭聞つて使者をもつて申上げけるは、長の旅に御疲れなさるべく、見苦しく候へども私宅へも御入來ありて、御うさを晴らし給へかしと申遣はしければ、和尚、よくこそおまねき、忝なしとて、使者と共に地頭の宅へ参り給へば、地頭も本意にや思ひけん、さまざま御馳走申上げて、さて何にても御手蹟をくだされたしと乞ひければ、一休、やすき事なり、旅宿へ歸りてしたため進ずべしと約束し、程なく彌太夫が方へ歸り給ふに、引ついで使者きたり、先程御契約申したる御手蹟、此者へ下さるべくといひきたれば、和尚も餘り忙しうや覺しけん、彌太夫の書したる文のありしを使者にわたし給ふ。使者よろこび、持ちかへりて主人に渡しける。即ち開きみれば、見知りたる彌太夫が手蹟なり。是はふしぎなることかな、使の誤にて

こそあらめ、使の者を尋ねれども、直々御手より賜はりしといふに、さては餘りにいそぎ
 て申したる故、御取ちがひありしものにやと、又も使をもつて、最前下されしは彌太夫が手
 蹟と見え申し候、ねがはくは御自身にかゝせ給ふをこそ望みには候へと申つかはしければ、
 和尚うなづき、さほどに深く御望みならば、いかで惜み申すべきと、したゝかに包みたる袋
 をこそはわたされける。使者もち歸りて主人に渡せば、やがて袋をひらき見れば、さもよご
 れたる古き下帯にてぞありけるが、地頭どのも手をうちて笑ひける。其のち又も御入りのを
 りふし、柳とばかりを大文字にて一字かきて送り給ひぬ。又ふるき屏風に、何ともかたらの
 知れぬ繪ありけり。亭主に問ひ給へば、あまり古くなり候て見分け申さず、私親どもが申し
 つるには、馬とか牛とかやらんにて御座候よし申さるれば、和尚、牛ならば角あるべし、角
 なければ馬なるべきぞとのたまふ。亭主申されけるには、御筆の序に此繪にも贊をあそばし
 下されよと申されければ、易きこととのたまひて、大文字にて、馬ぢやげなとぞ遊ばしける。
 其繪今にありて、いともめでたく御藏に納まりて、寶物の其一つとぞ成りたるぞぞ。

長咄に退屈せしもの事

○さて和尚さま、先夜の御話は面白く候へども、餘り長き御はなし故たいくつ仕り候、何と
 ぞ今夕は短き有がたきこと、我々どもにてもわかり安き御咄を御聞かせ下されたしと、一座
 のものども御願ひ申上げければ、一休、いかにもよきはなしあり、皆お聞きやれや、日本は

おろか唐天竺までも、この上もない有がたきものは、飯と汁ぢやげな、何と皆わかつたかわ
 かつたかと仰せられたり。

大俗問答の事

○ある時、出入の下男こゝろに思ひけるには、此寺の一休さまをば今までの知識者として皆々た
 づねて見えるが、問答とやらんを聞くに、何でもない事云うて御じぎして歸らるゝ、我等も
 和尚と問答して見んと、ふと思付きて、和尚様に御たづね申します、男と申すものは生れ出
 づるより珍寶と申すものをもつて出ますが、それを成人して落す人は是いかんと申しければ、
 いまだ言葉もひかぬに、金玉といへどもくろきが如し。

兩眼のあきらかなるを持ちながら、女にあへば目なしとぞなる。

女房は辨財天とうつくしい、美人といふも皮のことなり。

子は實なりこの事

○一休の御寺へ常々御心易く参りける百姓の、元より家貧しきうへに子多くもちて、其日も
 過しがたき程のものにて有りけるが、和尚のもとへ参り、さて一私どもはいかなる因果に
 て候や、御存じの如く子どもが追々出来まして、當年二歳になるを下として、都合十二人ま
 で出来まし、其中にはとし子もござります、私夫婦の者は、日に三度の食さへ腹に足るほど
 下された事とてなし、是が誠の子の地獄へおちたと申すものかどぞんじますれど、夫なら

ばごの子が憎いと申す者もござりませぬ。又かやうの貧家へ生れくる子供も不合せかと思へば、いよく不便にも存じます、これも前生の報にて候や、御聞かせ下されよと言ひければ、和尚打うなづき、尤もく、さりながら下の子は未だ二つとお云やれば、まだくいくたり生まうやら知れぬ、必ず夫婦のものの氣をつきぬやうにして、或時にはひとつ處へより寢酒でものもんで氣をはらし、仕込んで出かしくするがよいと仰せければ、びつくりして、和尚さま、此上出来ましたら夫婦の者は何となりませうと申しければ、これは夫に就いてはなしがある、昔奈良の都の頃、白木の長者とて日本に誰知らぬ者なき大百姓があつたげなが、其ごなりに丁度そなたの様な貧家に、種腹ひとつにて十八人の子をもつて、今其方の申さる通り、親ふたりは正月元日より大晦日まで食の足ること知らず、隣の大百姓の事をうらやみ居けるが、ある時夏炎天に、大勢をあつめ麥をふみ、圍ひのうちは元より門外までにも干しひろげたるに、貧者は其麥を見るにつけても、此干したる麥むしろ十八枚だけあるならば、子供に一枚づつ、當てわかちなば、我等夫婦が此苦みも有るまじきと、思ふ事をもしらず、子供等は足に任せて遊び歩いて、目のとく所には一人も居ぬことよと思ふ折から、俄に空かき曇り、大雷鳴りはためき、大夕立降り來り、大道忽ち大河の如くなりて、件の干したる麥、なかく、取入るべき間もなく残らず流したるが、隣の夫婦は門口へ出で、いかせんと思ふ所へ、あちらこちらより走り歸りけるゆゑ、頭のかずを數へ見れば一人も不足なく、

剩へ格別身をも濡らさうりける、依つて昔より子ごもは實ちやといふ程に、出かしやれ出かしやれ、其長者といへるは、大和國十市郡、天の香具山の東北にすこし高き岡山を長者屋敷といひ、また其わきに白木塚とも箸塚ともいへる塚あり、これは其時の長者、主人は元より家内出入るものまで一飯毎に其箸を捨て、ふたゝび用ゐざれば、其捨てたる箸自然と山となりしとて、箸塚といひて今にあり、又佛説の中にも、鬼子母神といへるは、三千人の子を持ち給ふ、其うち一人を隠され、夜叉と成り給ふといへる事もありとて、歌よみて賜はりけり。

親となり子と成りくるも今ならず、二世も三世も盡さぬ契ぞ。

かすもなき子を賣る人もありと聞く、親てはなうて鬼の再來。

親は過去わが身は現世子は未來、後生大事と子をば育てよ。

八つ橋にて狂歌の事

○三河の國八つ橋は、名にしおふ名所にて、そのかみ業平もかきつばたの五文字を句の上に おきて歌よまれけるとかや。一体にも、いかなる名所にや御覽なされたくや思召しけん、とこの里人に案内させて御覽するに、八つ橋は荒れて杜若もなく、ところせきまで田をうゑてければ、いづれを八つ橋とも見もわかぬていなりければ、

おとにきく三河にかけし八はしも、田ばかりありてかきつ葉はなし。

とあそばされけるごかや。

浪人御引立ありし事

○しばらく甲斐の國に御逗留のうちに、一人の浪人御出入り申しけるが、一休さまは生佛に
 てましますよし國中みなく申すことに候へば、何卒我が身の不自由なるを頼み奉りて、身
 上にあり付き候やう偏にたすけ給へとて、ひたすら願ひければ、和尚もふびんに思召され、
 一門にてもなきやと問はせ給へば、某が一門歴々まかりあれども、尾羽打枯らしぬれば恥か
 はしく参り得ず、且は路銀のよすがもなく、不自由にて迷惑申す身にて候、あはれ和尚さま
 の御かげにて身代に有りつき申たきよし、ひたすら頼み上げれば、和尚打うなづき日ひけ
 るは、其方藝能は何を得たるや。浪人答へて、萬事不調法に候と申上ぐる。いやくれば
 きの果とあれば禮樂射御書數のうち、一々ゆび折立てとひ給へども、一つとして存せぬよ
 し申上げれば、扱は浪人したる事道理と苦々しく、しばらく思案し給ひけるに、彼浪人申
 すには、外に存じたる事なく候へども、故あつて敦盛の舞一番存じて候といふに、一休さ
 しめして、夫こそ日本一の事よとのたまひ、しみく内談遊ばして不便がりするものをか
 たらひ、其外鼓打などをよびあつめ天晴云合せあり、芝居に幕を打ち、こゝかしこに高札を
 たて給ひける。

一 此度上方より幸若罷下 勸進能仕る勸進元は日本老和尚一休

と遊ばされしかば、侍はいふに及ばず、町人百姓五里七里をいとはす、貴賤群集して、さも
 廣き芝居に小家も破るゝほどに見えたる所へ、かの浪人、装束つけ、氣だかく身づくろひし
 て、舞臺へ出でて、あつもりを一番舞ひすまして樂屋へ入るとひとしく、一人の男出で、ま
 ことに御歴々さま御入り御見物のだん有がたきなど慇懃に一禱をのべ、さて此次には何をか
 舞はせ申さん、御このみ次第と申しければ、多勢の見物口々に大職冠よ、いや高館よ、清茂
 よなどと、思ひく言はやしけるごころ、豫て云合せありけん五六人のあふれものごも、
 こゝかしこより跳り出で、いや外の舞は見たくなし、敦盛を舞はせよといふふれたる男、
 同じ舞は御退屈に候はんといへば、かのあふれ者共、いや我々がすきぢや、敦盛を舞はさず
 んば芝居を踏くだかん、いや掴みひしがんなご云ふ程に、又敦盛を舞はしけるが、舞はて
 又前の男出で、口上をふれければ、又溢れもの出で、いや敦盛と云ふまゝに、つやけて四
 五番まはせける。其後は先づ今日は御いとまごひとて追出し、木戸口にて、明日は取かへ御
 覽に入る、評判とふれければ、前の日より人も人は多く入りぬ。御定りの敦盛一番舞はし、次
 はといへば、又前日の如く、豫て仕くみたる事なれば、幾へんにても敦盛よと、七日までこ
 そは仕たりける。彼浪人たよりを得て、一廉の身上となりけるとかや。所の地頭の耳にも入
 りぬれども、一休の事なればとて御叱りもなかりけると也。

濁り酒の問答

○一休和尚山居しておはします時、親しく御出入申す仁、寒さの御見舞申せし折から、にごり酒をまゐりの給ふところへ参り合せてよめる。

山居して心すますと聞きぬるに、濁り酒をばいかで飲むらん。

其とき和尚とりあへず、

山居してのむべきものを濁りざけ、とても浮世にすむ身ではなし。

と遊ばしけるとかや。

一休諸國物語 終

語物國諸休一



製複許不

大正十年七月三日印刷
大正十年七月七日發行

【定價金二十五錢】

編輯所	日本名著文庫編輯部
編輯者兼發行者	東京市淺草區三好町七番地 大川錠吉
印刷者	東京市淺草區南元町廿六番地 川崎清三
印刷所	同所 聚榮堂第一印刷部

發行所

東京市淺草區三好町七番地

聚榮堂

電話淺草一五七番、振替東京四〇九番

MADE IN JAPAN.

187
080

日本名著文庫

四六判頗る美装
定價各冊金二十五錢
郵稅各冊金 四 錢

- 1 神皇正統記全 靜村迂生序
- 2 鳩翁道話全 寶鳩翁著
- 3 心學道の話全 奥田壽太講
- 4 大和俗訓全 貝原益軒著
- 5 近世畸人傳全 伴藁蹊著
- 6 常山紀談前 湯淺元禎編錄
- 7 常山紀談後 湯淺元禎編錄
- 8 新譯近古史談全 大槻盤溪著

- 9 武將感狀記全 淡庵子編輯
- 10 評釋江戸繁昌記全 寺門靜軒著
- 11 旬殿實々記全 曲亭馬琴著
- 12 一休諸國物語全 平田北水編輯
- 13 質屋の庫全 曲亭馬琴著

▼以下續刊

終

